

和歌山大学観光学部の目指すもの

和歌山大学観光学部
学部長 大橋昭一

ご挨拶

和歌山大学観光学部が発足しました。何よりもまず、昨年度観光学科開設に際し、そして本年4月観光学部新設に際し、関係の皆様、地元の皆様より賜りましたご支援、ご高配、ご鞭撻に対し心から厚くお礼を申し上げます。本年6月8日には「和歌山大学創立60年記念ならびに観光学部設置記念」の催しをさせていただくことができ、多くの方にお集まりいただき、喜んでいただくことができました。これまでの御芳情に厚くお礼を申し上げますとともに、今後もこれまで以上のご支援、お引き回しを賜りますよう、本誌上をかりて衷心よりお願い申し上げます。

本学部の特徴

本学部は、何よりも、観光を広くとらえることを特色としています。まず第1に、地域振興を根本的柱の1つとして観光の発展・振興を考えることを理念としています。観光は、中心となる観光資源はじめ宿泊業、飲食業、交通業、旅行業など種々な分野にわたる広い領域のもので、これは、少なくとも1つの地域としてとらえ考える必要があるものです。観光戦略とか観光政策といわれる場合も、当然ながら、地域戦略ないし地域政策としてとらえ、推進することが肝要なことと考えています。

地域的集合戦略として、最近、ポーター (Porter, M.E.) の唱えるクラスター戦略がわが国でも脚光を浴び、経済産業省などではこれを強力に推進しています。しかし、少なくとも、ポーターがいうそれは、根本的には、中心となる企業 (複数) の「企業戦略」と「競争環境」が中核的地位を占めるもので、本来の地域戦略としては足りないところがあります。特に観光分野では、それを超える地域理論が必要かと思えます。

第2に、本学部は、いわゆる観光業といわれる企業や経営体の事業運営面を絶対不可欠な土台としつつも、それを超えたものを含めたところにおいて、現在求められている真の意味での観光研究・教育の意義があると理解しています。観光にかかわる業務、つまりビジネス面だけではなく、ビジネスとはなっていない面 (non business) も含めて、観光をとらえることを理念としています。この点は、他大学にはない、天文、医療、映像、色彩、音楽等も重要な科目として設置しているところに現れています。

ちなみに、アメリカでは1990年代に、「観光 (tourism) とはすなわち観光産業 (industries) のことだ」という見解に対し、「観光はもっと広いものだ、観光産業はその一部にすぎない

(partial industrialization) 」という見解が提起され、一大論争の展開されたことがあります*1。これからいえば、本学部は、後者の観光を広くとる考え方に立脚しています。これは、いうまでもなく、観光の根本的意義にかかわる問題です。すなわち、観光はそもそも人間にとってどのような意味をもつものかという問題です。

観光の意義については、種々な見解があります。ちなみにアメリカの有名な経済学者、ヴェブレン (Veblen, T.B.) は、人間には「みせびらかしのために消費をする性向」があると言っていますが、それに依拠して、観光とはそういうもの、すなわち、観光で得た見聞や体験を誇示し、社会的声望を得る手段の1つという見解もあれば、観光は「日常生活からの脱却を目指すものだ」という論者もあります。私見では、これは、少なくとも現在では、人間の自己実現欲求の1つとみるのが妥当ではないかと思えます。

わが国において、一般に観光に対する関心が高まったのは、高度成長・バブル崩壊後です。自己実現は、高度成長のころまでは、仕事のなかにあるという考えが強かったのですが、今では自己実現をもう少し広くとり、人間欲求のなかには観光欲求といったものがあると考えられるべきものと思えます。そうした人々の心のなかにあるものを出発点として観光を考え、構想することが必要と思えます。そこから「新しい観光」の考え方も生まれてくると信じます。

本学部教育の特色

本学部のカリキュラムは、従って、科目が多く、多くの分野に及んでいることが、何よりも特色です。そのなかでも本学部独自なものに「華道論」「茶道論」「着物文化論」等があります。これらの科目はかなり実践的で、実質的に全員必修にしています。日本的なものを学び、身体で会得して、そのうえで観光を考えてもらうという趣旨に基づくものです。

ちなみに、特に1970年代以降、日本的なもの、あるいは日本で育ってきたものが世界で評価され、日本人として改めて考えさせられることがいくつか起きています。リーン生産方式と名づけられ、世界一の自動車生産方式として激賞されたトヨタ方式はいうに及ばず、日本の長期継続的取引慣行をよしとするリレーションシップ・マーケティングなど多くの例があり、最近では日本で、リレーションシップ・バンキングが唱えられています。観光では、リレーションシップ・ツーリズムといった考えが必要でないかと思っています。

今後、国際化は、ますます進んでゆくでしょうが、「日本的なもの」を土台にしてそれに対処してゆくのが肝要と考えています。その一方、本学部では、英語教育に特に力を入れています。正課以外にエクステンション授業として、正課以上の時間を英語教育に充てています。現に英語が国際語となっている以上、国際舞台で活躍するには英語の力は不可欠です。「精神は日本、言葉は英語」という人材を育成したいものと念願しています。

観光学部の教育でさらに重視しているものに、フィールド研究があります。観光を広くとって、新しい観光の創造をスローガンとする本学部としては、学生たちにも「作られた

観光」を学ぶだけではなく、自ら「観光を作り出す」という問題意識と意欲をもって、進んで地域に出て行き、そこで観光を見出し、発展させるという態度をもって欲しいと指導しています。

観光学部学生は最高年次がまだ2年生で、専門演習もインターンシップも来年度から始まります。インターンシップはもとより専門演習でも、先生と学生たちが一体になってフィールド研究に赴き、必ずやこれまでの他大学観光学部にはない成果が挙げられるものと思っています。

ちなみに、本学部には観光経営学科と地域再生学科とがあり、入学後半年後に本人の希望によりいずれの学科に所属するかが決まる仕組みになっていますが、現在までのところ、両学科の希望、従って両学科所属の学生の数は半分ぐらいつつです。将来出身地に帰って地域振興、地域再生の仕事に携わりたいという熱意のある学生が多くいるのです。本学部が単なる狭い意味での観光だけの学部でないことを端的に示しています。

次に、観光の研究・教育がわが国以外ではこれまでどのような状況にあったかを、主としてドイツ語圏を中心に説明させていただきますが、その前提として、まず、観光のこれまでの発展の経緯について概述します。

観光発展の状況—欧米を中心にして

欧米の場合、観光が広く一般的となり、全般的に盛んになって、今日のような観光活動の発端になったのは、概ね第1次世界大戦以後で、これを基盤に観光を学問的に究明する試みが本格的に始まりました。その要因として、何よりもまず、観光の大衆化・大規模化が始まり、観光が大きな社会的事象となってきたことが挙げられます。

それを生んだものは、一方では鉄道の本格的な普及、ホテルなど観光関連施設や制度の整備など、観光を普及させ発展させる直接的条件の充実・整備が急速に進んだことです。他方において、働く人たちの労働時間短縮や休暇制度確立が緒につき、自由時間が増加し始めたことや、所得向上などにより一般大衆にも観光が比較的容易なものとなってきて、多くの人にとって観光が実際にも可能になったことが挙げられます。マス・ツーリズムとかソーシャル・ツーリズムといった言葉が生まれました。観光は、特にドイツでは盛んで、ナチス時代でもその傾向は変わりませんでした*2。

これに照応して、観光地の自然環境、文化的社会的環境、経済的環境が大きな影響をうけ、社会的に大きな問題となってきました。観光は、基本的には、外部から来た観光客が一時的に滞在して行う消費活動ですから、観光地の長期的な生活基盤、生産や商業などの営業基盤に対して、善きにつけ悪しにつけ、深い影響を与えます。観光が大衆化大量化するとともに、その問題性が顕在化してきたのです。

この場合、さしあたり、多くの場合、経済的側面がまず強く注目されました。というのは、営業活動はもとより生活活動にしても根本は経済的側面にありますから、観光客が観

光地で消費活動を行うことによっておきる経済上のアンバランスが問題となってきたからです。こうした背景に、例えばドイツ語圏では、観光研究について、まず、経済的側面を中心に国民経済学あるいは経営（経済）学の観点から究明を行う経済学的アプローチがさしあたり比較的主流をなしてきました。

例えば、早くから観光に触れたものとしては、当時の有名な経済学者、ロッシャー（Roscher, W.G.F.）などが知られていますが、観光についてのまとまった文献としては、国民経済学的観点から観光を論じたシュトラドナーの1905年の著『観光』*3が有名です。同書では「観光地理学」（Fremdenverkehrsgeographie）が併せて重要な地位を占めることが主張され、ドイツ観光学研究では経済学的方向と地理学的方向が2大主流となることがすでに示されています。

なお、アメリカについても、1996年フリジエン（Fridgen, J.D.）は、観光（tourism）の研究は多くが経済ないし経済学を土台にしてきたものであったことを指摘しています*4。

観光学研究の進展—ドイツ語圏の場合

大学など高等教育機関で観光についての研究・教育活動がこれまでどのように行われてきたかを、ここでは、ドイツ語圏の特徴的動向に絞って紹介させていただきます。

その最初の本格的なものは、すでに1914年デュッセルドルフで設立された「ホテル・交通大学」*5です。同大学は、第1次世界大戦後、当時のドイツ経済の破綻もあって、1921年実質閉校になりましたが、その主宰者であったグリュクスマン（Glücksman, R.）により、1929年、ベルリン経済大学に「観光研究所」*6が設立されました。この研究所は、この種のものとしては、ヨーロッパ最初のものといわれますが、1933年閉鎖となっています。

これに代わるかのように、1934年ウィーン経済大学に同様な「観光研究所」*7が設置されたのにつづいて、1941年ハイデルベルグ大学に「観光経営経済研究所」*8が設けられ、同じく1941年、スイス・ベルン大学に「観光研究所」*9が設立されました。現在も観光研究の中心地の1つであるスイスのザンクト・ガレン大学では、1941年「観光ゼミナール講座」*10が開設されています。

これらの研究機関等の名称からも読みとられますように、ドイツ語圏では、日本で通常観光といわれる言葉に相当するものに、Fremdenverkehr と Tourismus という2つの言葉があります。ドイツ語本来の言葉は前者で、後者は近年用いられるようになったものです。

ドイツ語圏でも、第2次世界大戦後英語文化の浸透が激しく、Fremdenverkehr に代わって、英語の tourism にあたる Tourismus が、1970年代あたりから多く用いられるようになったのですが、しかし、実は、この2つの言葉は、ドイツ語圏における観光の2つの考え方を象徴的に示してきたものと思われま

Fremdenverkehr と Tourismus とは、今日でも、用法に特段の違いはないとされてい

ますが、ニュアンスの違いはかなりあります。**Fremdenverkehr** は、直訳的には、「他者との交流」という意味のもので、定住場所とは別の土地へ行って滞在し、そこの風物や人 (**Fremde**) と交わる (**Verkehr**) という意味の強い言葉です。これに対して、**Tourismus** はいろいろな所を廻るというニュアンスが強い言葉です。しかし、その語幹である **Tour** は、英語の **tour** と同じで、「廻る」を意味する言葉としてドイツ語にはもともとからあり、日常的にも使われてきたものです。

こうした2つの言葉のニュアンスに照応して、ドイツ語圏における観光概念には、もともと2つの流れがあったものと考えられます。例えば、ドイツの観光学研究で観光概念の古典的規定として有名なものの1つに、1927年モルゲンロート (**Morgenroth, W.**) の提示したものがありますが、かれは、観光の根源を遍歴 (**Wanderung**) に求めています*11。

これに対して、モルゲンロートの規定と並ぶ古典的規定として有名な、1939年ポザー (**Poser, H.**) が提示したものでは、観光は、他の所の人や風物などと交わることでであるとされています。このためこの場合には、旅行・交通 (**Reiseverkehr**) は観光の本質的要素ではないとして、観光概念から除外されています。旅行の楽しみはあくまでも旅行自体の楽しみであって、観光の楽しみではない。観光の楽しみは滞在にある、というものです*12。なお、観光すなわち滞在という考え方は、現在でも欧米では有力な見解の1つです。

こうした先駆的研究のうえにたつて、第2次世界大戦後の1968年、ヤコブ (**Jacob, G.**) は、唯物史観にたつて、観光を地域総体としてとらえ、それが自然総体 (風景など)、経済的諸関係 (生産関係はじめ交通業、宿泊業、商業、工業、建設業等の諸領域)、および上部構造 (国家・政府、法律、イデオロギー等) の3者からなる総合的領域であるという、壮大な見解を提示しています*13。観光をできる限り広くとらえる立場からは、今日でも聞くべきものがあると思います。(以上のドイツ語圏の観光研究については大橋昭一「ドイツ語圏における観光概念の形成過程」『大阪明浄大学紀要』第1号2001年3月、同「第二次世界大戦後ドイツ語圏における観光概念の展開過程」前掲誌第2号2002年3月で詳しく論述しています)

おわりに

以上は、ドイツ語圏に限定したのですが、現在世界で観光の研究・教育が最も盛んなのはアメリカです。世界のリーダーといっても過言ではありません。ホテル関係を中心にコーネル大学等が特に知られています。しかし、イギリス、ドイツ、フランス、オーストラリアも結構盛んです。イギリスはアメリカほど研究者もいず、大学など研究機関も少ないのですが、アメリカに対抗しようとする意気込みが強く感じられます。

わが国は、これらにくらべて全く遅れていると言わざるをえません。この遅れを一日も早く取り戻し、追い抜き、世界一流の観光の研究・教育国になるようにすることが、和歌山大学観光学部に課せられた使命と考えています。

-
- *1 Leiper, N., Partial Industrialization of Tourism, *Annals of Tourism Research*, 1990, Vol.17, pp.600-605.
- *2 Semmens, K., *Seeing Hitler's Germany: Tourism in the Third Reich*, New York: Palgrave Macmillan, 2005.
- *3 Stradner, J., *Der Fremdenverkehr*, Graz 1905.
- *4 Fridgen, J.D., *Dimensions of Tourism*, East Lansing: Educational Institute, 1996.
- *5 Hochschule für das Hotel- und Verkehrswesen
- *6 Forschungsinstitut für den Fremdenverkehr
- *7 Institut für Fremdenverkehrsforschung (その後 Institut für Tourismus und Freizeitwirtschaftと改称)
- *8 Institut für Betriebswirtschaft des Fremdenverkehrs
- *9 Forschungsinstitut für Fremdenverkehr (その後 Forschungsinstitut für Freizeit und Tourismusに改称)
- *10 Seminar für Fremdenverkehr
- *11 Morgenroth, W., Fremdenverkehr, in: *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 4. Aufl., 4. Bd., Jena 1927.
- *12 Poser, H., Geographische Studien über den Fremdenverkehr im Riesengebirge, *Abhandlungen der Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen*, 1939, H.20.
- *13 Jacob, G., Modell zur regionalen Geographie des Fremdenverkehrs, *Geographische Berichte*, 1968, H.1.